九月二十三日の「秋分の日」を真ん中として」、前三日、後ろ三日の七日間を「秋のお彼岸」と言います。お墓参りに行った人がいるのではないでしょうか。

これに対して、来年の三月二十一日、そう、六年生の卒業礼拝の日＝「春分の日」を挟んでの七日間を「春のお彼岸」と呼んでいます。

夏も終わり、すっかり秋めいてきた「秋分」の頃とだんだん春らしくなる「春分」の頃を指して、「暑さ寒さも彼岸まで」という慣用句があるくらいです。

さて、この「彼岸」ですが、ご先祖のいる世界、つまりあの世のことを指しています。反対語は「此岸＝しがん」で、ぼくたちが生きている世界を指します。秋分の日と春分の日は、彼岸と此岸が最も通じやすくなるのだそうです。だからお墓参りに行くのですね。

よく言われる「三途の川」は、彼岸（あの世）と此岸（この世）の間に流れていると言われる川のことです。「三途の川」を渡るのに渡し船に乗るようで、その料金は「六文＝ろくもん」。「文」は江戸時代のお金の単位。江戸時代は亡くなった人のお棺に渡し賃として、本物の六文を入れていたようです。

六年生なら聞いたことがあるでしょうか、「大坂夏の陣」で、あの徳川家康さんをきりきり舞いさせた真田幸村さんの家紋が「六文銭」です。

「戦場においては、いつ死んでも構わぬ。」という覚悟を示すために家紋にしたようです。何やら恐ろしい話になってしまったので、電車好きの「鉄ちゃん」が飛びつきそうな話をひとつ。

長野と、みすず山荘がある軽井沢を結ぶ観光列車があるそうで、その名は「ろくもん」。豪華な食事が楽しめ、車体には「六文銭」がバッチリと入っているそうです。誰か乗ったことがある人がいましたら、詳しく教えてください。

本題に入りましょう。「彼岸」の頃に咲く花と言えば、そう、「彼岸花」。「曼殊沙華＝まんじゅしゃげ」などという別名もあります。なぜかお墓のまわりに生えているイメージのある花です。

現代の日本では火葬がほとんどですが、昔は「土葬」と言って、亡くなった人を棺に入れて、お墓の土の中に埋めていました。そのため、モグラやネズミに遺体を荒らされることが無いようにと、毒のある彼岸花を植えて、動物を寄せつけないようにしていたようです。

彼岸花の球根は有毒でも、水にさらして毒を取り除くと、豊富なでんぷんをとることができます。そのため、飢饉（ききん）のときの非常食として使うため、君たちのような食いしん坊!?が、間違って口にしないようにと、用心のため、お墓などの普段人のこないところに植えていたようなのです。昔の人たちの「知恵」にはつくづく感心させられます。

彼岸花は、花の咲き方が少し独特。普通の植物は、茎から葉ができて、そこから花を咲かせます。彼岸花は逆で、花が咲いているときには葉っぱを出さず、花が終わってから、葉っぱを出すという方法をとっています。すっかり花が終わり、くたっと枯れかけている茎の根元に、葉っぱが発見できます。

彼岸花の別名の一つに「葉見ず花見ず」がありますが、まさにこのことを指しています。

彼岸花はライバルの多い夏に葉っぱを出さず、ほかの植物が少なくなる冬に向けて葉っぱを出し、光合成を行いエネルギーや栄養を地下の球根に貯める。翌年の夏頃、ライバルが増えてきたらさっさと葉を枯らして、地上から姿を消す。秋に一気に地上に現れ、花を咲かせたら、すぐさま花を枯らし、葉っぱを出す。この繰り返し。まわりの植物が少なくなる冬に自分の葉っぱを出して、光を独占する。彼岸花はなんて頭がいいのでしょう。（あっ、いや、彼岸花に頭はあるのかしら…。）

それにしても彼岸花の見事な「作戦」。人間の世界にも応用できそうな気がします…。

（立教小学校校長　田代　正行）